

仙台市男女共同参画推進センター

エル・ソーラ仙台

調査日：2011年8月3日

3月11日、最大震度6強を記録した仙台市で、高層ビルの28階、29階にあるエル・ソーラ仙台は、立ってられないほどの揺れに見舞われた。幸い建物自体への大きな被害はなかったが、施設内は足の踏み場もないほど物が散乱した状態だったため、翌日から休館。再開したのは、4月5日であった。

インタビュー対応者は、エル・ソーラ仙台管理事業課の武者元子課長、同加藤志生子係長の2人。

1 発災時の状況

◆当日の様子

エル・ソーラ仙台（以下、エル・ソーラ）は、発災時は通常開館しており、図書資料ラウンジなどフリースペースの利用者や貸室利用者、相談の利用者も含めたくさんの市民がエル・ソーラを利用していた。震度6強の大きな揺れで建物への重大な被害はなかったが、室内用間仕切りは倒壊し、移動書庫が一部倒れて、約2万冊の図書が床を埋め尽くす状態であった。揺れが収まってからは、日ごろの防災訓練のとおり、職員が利用者をまず各階の集合場所に集め、状況を見ながら、順次、非常階段で1階まで避難させた。発災時は、平日の午後で職員体制も比較的厚かったので、ベビーカーを伴っての利用者もいたが、ほかの階の入居者の手も借りて利用者を1階まで安全に誘導することができた。

エル・ソーラは仙台駅近くに位置しているが、周辺ではビルの倒壊や火事の発生がなく、エル・ソーラ職員はまだだれも地震による被害がこれほどまでに大きかったことを認識していなかった。携帯電話のワンセグで津波が来たらしいとの情報を入手していたものの、すぐに電源が切れてしまい、状況把握はあまりできていなかった。施設内に非常用ラジヲを備えていなかったのは反省点で、その後すぐに非常時の情報収集の手段の1つとしてラジヲを発注した。

エル・ソーラの通常の開館時間は22時であるが、建物の非常用電源が20時で切れてしまうことがわかり、29階に残っていた利用者には、その時間までには帰ってもらうことにした。職員は、利用者がすべて退館したのを見届けて、帰路についた。ほとんどの職員は無事に帰宅することができたが、中には避難所で一夜を明かした職員や、子どもを預け

【センター概要】

エル・ソーラ仙台は、2003年5月に仙台市の2つ目の男女共同参画推進センターとして、仙台駅前の高層ビルの28階、29階に開館した。エル・パーク仙台同様、当初は財団法人せんだい男女共同参画財団が管理運営を受託し、2004年4月から、同財団が指定管理者となっている。エル・パーク仙台とは、2館で機能を分担しており、エル・パーク仙台が市民活動団体支援機能を中心に担っているのに対し、エル・ソーラ仙台は、学習・研修、相談、情報提供などの機能を担っている。2010年度に行財政改革の観点から館の見直しが行われ、震災が起ころなければ2011年度には4月当初から一部を閉館しながらの改修工事に入る予定であった。職員数23人。専有面積1,659㎡。

URL <http://www.sendai-l.jp/>

ている保育所へ迎えに行ってみたら保育所ごと避難しており、あちこち子どもを探しまわった職員もいた。

震災翌日からは臨時休館とし、出勤できる職員で施設内の後片付けや利用者からの問い合わせに応じつつ、今後の対応策を検討した。エル・ソーラは、震災前に施設の改修を決めており、4月から29階を、6月から28階を順次閉館する予定であった。しかし、改修工事に伴う休館は当面延期し、まずは復興に向けてできることから実施していくことを決め、仙台市ので承を得て、4月5日には臨時開館にこぎつけた。その後あらためて、改修工事のため、6月13日から休館とすることが決まった。

◆仙台市の被災者支援窓口などへの応援

発災の数日後からは、仙台市の要請により、市の外郭団体など関係機関の職員も総出で、仙台市が市内各所に設置した被災者支援の窓口や仙台市災害ダイヤルの応援に職員を派遣した。エル・ソーラ職員もシフトを組み、3月下旬まで災害時緊急電話相談の対応に当たった。この電話相談窓口で、水や物資の配給先、ライフラインの復旧目途、仮設住宅の申込み方法、義援金の受取など、あらゆる相談を受けることになり、市民の被害の深刻さや仙台市全体の被災状況、災害支援情報などを知ることができた。この経験はその後、エル・ソーラとして被災者支援を行う際に活かされたという。

2 実施した活動

◆改修工事のための休館を延期し、市民のためのスペースを開放

支援活動に当たっては、まず「館という資源」を使ってできることから始めようと考えたという。余震が続く中、高層階に位置するエル・ソーラを再開したのは、この時期、市内の公共施設のほとんどが被災して使えないか、避難所になっているかで、人が集まれる



「こころと暮らしの立ち直りを支援するスペース」での情報提供

場所、だれかと話せる場所、親子連れがちょっと休める場所が求められていると考えたからだった。そこで、エル・ソーラ 28 階にある貸室を通常提供するほか、4 月から休館予定だった 29 階の「市民交流スペース・図書資料ラウンジ」を「こころと暮らしの立ち直りを支援するスペース」として臨時開館した。また、図書の貸出を従来どおり行い、フリースペースの運営ルールなども柔軟にして、できるだけ利用者がほっとでき、居心地よく過ごせるよう心がけた。新聞のクリッピング記事や、物資の募集・配給などの

情報を提供する場としても運営を続けたところ、小さな子ども連れの母親などが徐々に来館し、多くの市民が訪れるようになったという。

エル・ソーラ再開 2 日後の 4 月 7 日深夜、最大余震に見舞われ、またしても書架から蔵書がすべて落下し、あたりに散乱したが、翌日以降も片付けながら利用者の受け入れを続けた。

このスペースの運営には、エル・ソーラ職員とともに、特定非営利活動法人イコールネット仙台（以下、イコールネット仙台）のスタッフが、常駐して当たった。イコールネット仙台は、姉妹館エル・パーク仙台（以下、エル・パーク）の「市民活動スペース」の管理運営を受託している団体であるが、エル・パークは施設の損傷が激しく、再開の目途がたたない。その代わりに「こころと暮らしの立ち直りを支援するスペース」で、エル・パークの市民活動支援機能の一部を展開できないかと、イコールネット仙台に持ちかけ、双方合意のもと、実現させることができた。4 月半ばころから、普段はエル・パークを活動拠点としているグループのメンバーなども顔を見せるようになり、無事を喜び合ったり、近況報告や情報交換をしたりする場面が見られた。またこのころ、宗片恵美子さん（イコールネット仙台理事長）が財団法人せんだい男女共同参画財団（以下、財団）のスタッフとすぐに打合せできる場所にいたことが、その後の支援活動の展開を大きく後押ししたと、職員は考えている。

◆「女性の悩み災害時緊急ダイヤル」の開設

震災前、エル・ソーラの相談事業は面接相談を中心に行われていた。電話相談は週に 1 度の「女性への暴力電話相談」のみであったが、2011 年度内には電話相談を立ち上げる予定で準備を進めていたところであった。しかし、今回の震災の被害の甚大さが明らかになるにつれ、女性のための緊急電話相談「女性の悩み災害時緊急ダイヤル」の立ち上げが早急に必要だとの声が職員の間で徐々に高まり、3 月 29 日から前倒しでの実施を決めた。準備期間のない中での立ち上げだったため、相談員の研修もままならなかったことや、交通事情が悪く相談員の通勤に支障をきたしていたことなど、相談体制に不安を残しての開始であったが、「女性への暴力電話相談」を委託していた特定非営利活動法人ハーティ仙台が、この災害時緊急ダイヤルの相談にも加わってくれることになり、前倒し実施が可能になっ

たという。

この「女性の悩み災害時緊急ダイヤル」で受けた7月23日までの相談件数は324件。相談内容は、「震災で仕事を失って生活資金がない」「大きな被害を受けていないのに、余震が怖くて不安。そんな自分を情けなく感じる」「高齢のため、水や物資の受取が大変」「夫婦関係の悪化」「震災同居によるストレス」「子育ての不安」「支援制度が世帯単位での申請のため、別居中で利用できない」など深刻なものばかりであった。内訳は、DVに関する相談が全体の14%、夫婦・親しい男女間での関係についての相談が30%強、親子など家族関係の相談が20%などであった。

平時にエル・ソーラで受ける相談の約4割にDVの問題があることを考えると、DV相談の割合は少ないように見える。武者課長は、「避難生活に関する様々な相談が寄せられたこともあり、通常の相談の傾向と一概に比較することは難しい。津波被害にあった沿岸部の方は電話も残っていないし、故障や停電で電話が使えないところもある。また、避難所の電話では他人に聞かれてしまうなど、相談しやすい環境になかったことも影響しているかもしれない」と、その背景を推測する。相談者の多くは、テレビや新聞の災害支援情報経由で「女性の悩み災害時緊急ダイヤル」の開設を知ったらしい。避難所ではテレビや新聞などのメディアに接する機会が少ないため、「女性の悩み災害時緊急ダイヤル」にかかってきた電話相談の多くは、自宅にいる女性からだったのではないかと考えている。

7月27日からは「女性の悩み災害時緊急ダイヤル」を「女性のための電話相談」に切り替え、緊急ダイヤルではなく、通常の相談業務の一環として行っている。「プライバシーがより確保される仮設住宅への移転が進めば、電話相談の需要は増える可能性がある」と武者課長は語った。

◆ポータルサイトの開設と講座事業の組み換え

ホームページ上では4月3日から「被災したわたしたちが“今、ここ”をのりきるために」という被災女性支援のためのポータルサイトを開設し、情報提供を行った。開設に際し職員間で話し合いを行って、何度も確認したのは、「被災者に寄り添い、前進を押しつけない」サイトづくりと、女性のエンパワメントにつながる支援情報の提供の2点である。5月13日からは「わたしのペースでゆっくりと」にタイトルも変えた。「1日も早く復興しよう、頑張ろうというメッセージではなく、それぞれのペースでゆっくり回復していこうという姿勢にこだわり、女性が支援の受け手だけでなく、復興の担い手にもなりえるという視点を忘れないようにしたいと思いました」と加藤係長は言う。

一方、講座事業は、4月から5月にかけて「働きづらさに悩む若い女性のための講座（パソコン&しごと準備）」を、6月には子育て中の母親を対象に「ジェンダー・スタディーズ」を実施予定であったが、講師と相談し、「震災で傷ついた自分をいたわることから始める」をテーマとした内容にするなど、状況に応じて事業内容を組み換えている。

◆被災女性のニーズを汲みとっていくネットワークプロジェクト～せんとくネット

「相談やサイトの開設、スペースの提供と並行して、災害時に顕著になるジェンダー間

題に対し、この財団として取り組むべきことはもっとある、という思いがあった」と加藤係長は言う。自分たちが直接沿岸部などに赴くやり方での支援展開には限界がある。支援活動は「センターありき」で、エル・ソーラが自分たちの支援の拠点である、と考えた。エル・ソーラで、被災した女性たちのニーズを形にするとしたら、どんなことが考えられるだろうかと、職員間で話し合ってもいたという。

一方で活動できる状態になってきた仙台市内の女性たちが、少しずつ支援を始めていた。そうした人たちの話から、男性リーダーの反対により避難所に仕切りがないこと、必要な物資が行き渡らないことなど、様々な女性の困難さ、声の上げにくさがわかってきたという。個々の直接支援活動から見えた女性ニーズを事業化したり、何らかの形で仙台市災害対策本部や行政につないだり、いわゆる中間支援の役割を担うようなネットワークができないか。この思いが、「せんたくネット」の原形になった。

そこで、これまでに財団事業で講師をお願いした人や市民活動支援に携わっている人など、女性ニーズを汲みとる視点と現場感覚がある女性 7 人に財団から声をかけ、ゆるやかなネットワークをつくった。直接会うということは一度もせずに、メーリングリストで個々の活動から見えること、聞こえてきたことを共有しながら、いま必要な支援について意見交換していったという。

◆「せんたく代行」始動

仙台市内でもライフラインの復旧はなかなか進まなかった。職員も風呂に入れず、水の確保にも苦慮する生活をしており、避難所で十分な衣類がない中、洗濯もできない辛さは容易に想像できた。洗濯できても女性が安心して下着などを干せる場所はなく、盗まれてしまうこともある。実際、被災した親類の洗濯代行をして喜ばれたという話もあった。

何より「洗濯くらいならできる、やりたい」女性が、仙台市内にはたくさんいるはずと思えた。洗濯代行は被災者のために考えられた活動ではあるが、同時に「子どももいるし、避難所には行けないし、ボランティアも難しい。何かしたいが自分に何ができるだろうか」と自問する女性たちのためのものでもあった。

洗濯代行を始めるに当たってどう名乗るかは課題で、「こころと暮らしの立ち直りを支援するスペース」の運営のため、エル・ソーラに常駐していたイコールネット仙台の宗片さんと度々意見交換を行った。そのころすでに支援のためのいろいろな「〇〇ネットワーク」が立ちあがっていて、それらと差異化を図るネーミングが求められた。「いっそ洗濯ネットにしちゃおうか」という冗談のような提案に皆が「それがいいと思う！」と賛同し、この時初めて、ゆるやかな情報交換のネットワークだったプロジェクトに「せんたくネット」という名前がついた。洗濯をするだけではなく、被災した女性の様々なニーズを汲みとっていくプロジェクトなので、「“せん”だいの女性たちが、被災した女性の本音を“たく”さん汲みとって、一緒に解決していく“ネット”ワーク」との正式名称をむりやり後付けした。しかし、後で考えると「せんたい男女共同参画財団です」といって避難所に入っていきより、「せんたくネットです」と名乗るほうがストレートで、受け入れられやすいネーミングだったと感じているという。

洗濯代行サービスを知ってもらうために、初めは、チラシをつくって避難所に配ろうとしたが、市の担当者でもないかぎり、避難所に入っていくのは容易なことではない。実際に洗濯代行の活動ができるようになったのは、メディアの力によるところが大きかった。1人の被災者が新聞記事を見て、電話してきたことがきっかけで、その被災者が滞在する避難所に行き、女性リーダーに「せんたくネット」の活動を丁寧に説明し、理解してもらったことが、活動の広がりにつながった。

このように、しっかりとした女性リーダーが避難所にいれば、避難所生活における女性特有のニーズや課題に対応しやすい。しかし、常日ごろから地域住民と信頼関係をつくりながら活動を続けている女性でなければ、非常時にリーダーは務まらない。地域やいろいろな場で女性がリーダーシップを発揮できるよう、平時からのエンパワメントが必要だと痛感した、と加藤係長は言う。

洗濯代行のおおまかなフローは、実際にやりながらイコールネット仙台の宗片さんと相談しつつ決めた。同時に洗濯ボランティアを募ったところ、希望者はあつという間に200人を超え、延べ286人の女性が登録したという。

その後、仙台市内での活動が注目され、南三陸町で被災者支援を行う人から、南三陸町での活動を依頼された。しかし、南三陸町は仙台から片道2時間以上かかるため、その往復を洗濯物運搬のボランティアに頼んでいいものかと躊躇していたところ、南三陸町の避難所になっていたホテルが、運搬を担ってくれることになり、仙台から90kmも離れた南三陸町からも洗濯物をあずかることになった。エル・ソーラでは、多い時で1回30個、週にして60個の洗濯袋を南三陸町のホテルから受け取り、洗濯ボランティアに一人ひとり電話して、受取りに来てもらう橋渡しをした。



ボランティアに渡す洗たくもの

洗濯袋には下着などが入っているので、間違えて別の人に渡らないよう、連絡票を入れるなど工夫した。さらに、連絡票には洗濯ボランティアが被災者にメッセージを書く欄を設けた。「暑くなってきて大変ですね」といった言葉のほかに、「洗濯させてもらって、ありがとう」とのメッセージを書く人が多かった。支援する側に立たせてもらっている、とのボランティアの思いが、こんなところにも表れているのではないかと、この活動にかかわった人たちは感じている。

洗濯代行を始めたとき、「そういうニーズがあるのですか」と多くの人に聞かれた。これまで男女共同参画センターの事業も、ニーズありきで企画していくことが多かったが、今回のような非常時には、特に困難な状況に置かれた女性の視点、想像力が大事で、当事者がニーズを発するのを待つのでなく、まずはできることをどんどん行って、走りながら仕組みを考える方法が適していると思ったという。

「せんたくネット」の活動資金については、助成金を申請することも考えたが、そのための時間と人を割く余裕がなかったため、通常の事業資金以外の寄付金を活用した。そのため、ふらっと来館し「何かに使って」と使い道を指定せずに1万、2万と現金を置いてい

ってくれる利用者や支援者からの寄付金が、何よりありがたかった。

◆「せんたくネット」から生まれた、新たな支援

洗濯代行はその後、様々な支援活動につながっている。洗濯物の運搬で避難所に入ったボランティアには、「洗濯はありがたいけれど、そもそも下着の替えがない」「サニタリーショーツが欲しい」「物資の配給に下着はあったが、小さいサイズばかりで合うものがない」「配給されるズボンの丈が長くて困っている」などの声が聞こえてきたという。それが、「わたしサイズのブラジャー／サニタリーショーツを贈る」という支援活動になった。ホームページなどを通じて様々なサイズの下着を求めたところ、各地からたくさん下着が送られてきた。サイズごとに仕分けし、避難所に持っていくと、MサイズよりもLやLLサイズが喜ばれた。また、配給物資ではなく、日常から奪われた「選ぶ」という行為自体に、目を輝かせた女性たちも多かった。この経験は、「MDG ガールズプロジェクト」というもう1つの支援にも活かされている。

◆10代女子のための震災ピアサポート「MDGガールズプロジェクト」

震災から時間がたつにつれて様々な支援が立ちあがったが、10代女子には支援が届いていないのではないか、という印象があった。メディアは健気なストーリーや、避難所の中高校生たちが、与えられた役割を一生懸命にこなしている姿を映し出していたが、エル・ソーラの職員はそこに危うさも感じていた。だれもいないところで「めんどい」「疲れた」とボソッとつぶやいている、という話も「せんたくネット」の中で出ていた。

そこで、10代の女の子たちが前向きな気持ちになれるよう、かわいい手作りシュシュや鏡、ティーンズ向け雑誌、汗ふきシートなどを入れた女子セットを避難所に持って行って渡したところ、大変喜ばれた。同世代の女子から被災した女子に、物資ではなく気持ちのこもったプレゼントを贈ろうという活動「MDG ガールズプロジェクト」は、こうして始まった。

このプロジェクトを始めるに当たっては、初めからピアサポートの形を取りたいと考え、宮城学院大学の浅野富美枝教授や、「せんたくネット」の門間尚子さんを通じてドレメファッション芸術専門学校に声をかけ、協力してくれる学生を募った。「MDG ガールズプロジェクト」のMは宮城学院大学、Dはドレメファッション芸術専門学校、そしてGはガールズを表しており、流動的に約10人の女子学生が関わっている。



「MDGガールズプロジェクト」
手作りコーナー

第1回目の7月31日は、仙台駅近くの榴ヶ岡公園を会場に、おもに女子中学生80人ほどが集まり、それぞれが好きなプレゼントを選んだり、メイクコーナーや手作りコーナーで、少し年上のお姉さんからメイクや手作り小物の作り方を教わったりして楽しんだ。また、ドレメファッション芸術専門学校のメンバーが企画したファッションショーでは、ちょっと先を行くお姉さんたちが発する「ファッションの力」に、中高生は圧倒されつつ、

あこがれの気持ちも抱いたようだった。

このプロジェクトでは、財団は事務局として裏方に徹し、イベントの準備作業や事務手続き全般を担っている。10代の女の子たちが前向きな気持ちになれるようにと始めたプロジェクトであるが、同時に、被災者である女子学生自身の復興につなげたいとのねらいもある。今後も女子学生たちが達成感を得られるようなしくみを考えながら継続していく。

3 今後の活動

「現地（津波被害が甚大な沿岸部など）に行けない、何もできない」と無力感を感じている女性たちも、なんらかの支援を「する」側に立つことで、エンパワーされるとの考えから、エル・ソーラでは一貫して、「ここで」できる支援、館を拠点とした支援を基本にしていくという。当面は様々な立場の女性たちが語り合う場を設け、一人ひとりの気持ちの立て直しを応援するなど、震災ケアを丁寧に行っていきたい。ちょっと外に出ることで、仮設住宅や地域では出せない気持ちを吐き出したり、自分に向き合えたりすることもある。エル・ソーラはそのための安心な場を提供していきたいと考えている。

また、自治体の女性職員を始め、支援活動を行ってきた女性たちの疲労も深刻なことから、支援者に対する支援が必要だと考えている。「MDG ガールズプロジェクト」も継続していく。「何か特別なこと、大きなことではなくとも、一人ひとりの気持ちの回復に寄り添っていくイメージで事業を丁寧に継続していけば、せんとくネットのように、いろいろなことが派生し、広がっていくのではないか」と加藤係長は結んだ。